

Penz. et Sacc., in *Malpighia* 11: 821 (1897).

Hab. Adult of *Vespa* and *Bombus*, Hymenoptera. Lake region of Uganda, coll. by T. D. Maitland, 1919, kept in Kew. Type collected in Tjibodas, Java.

この挿図 (Fig. 11B) のもとになった標本 (Fig. 12B) はウガンダ産であり、タイプではない。頭部の先端の針状突起は折れて元の部分のみ残っている。頭部表面の凹突などから推して、この同定は正しいと思う。

75. *Cordyceps robertsii* (Hooker) Gray, Notices Ins. Fungi p. 6 pl. 2 f. 2, 4 (1858). Syn. *Sphaeria robertsii* Hooker, Icon. Plant. I pl. 11 (1837) et in Hooker, Journ. Bot. 3: 77 pl. 1A (1841).

Hab. Larva of *Porina* moth, Lepidoptera. Type in Kew, ex Herb. Ch. Badrington, New Zealand.

ここに示す写真 (Fig. 10B) の左上のものがタイプであり、これのスケッチ (Fig. 13) が Hooker (1841) の記載に添えられて居り、比較のために両者を掲げる。なおタイプ標本にはこの挿図の原図が添えられてあり、その左下に H. O. Stephens 描写とあり、右下には *Sphaeria stephensii* Berk. と走り書きされているが、この名は未出版に終った。なおキーにはオーストラリアの Little Barrier Island 産の標本があり、これに添えて生態に関するメモがある。重要と思はれるのでここに転写する。

"Vegetable caterpillar: The *Porina* moth is a very common one and there are nineteen New Zealand species. The larval form of at least three of these (*enysii*, *dinodes* and *signata*) ingest the spores of the fungus *Cordyceps*, while they feeding on roots underground. In time nearly all the animal tissue is replaced by the fungus and then a stroma grows from the mouth of the caterpillar, pushes its way above ground where it may be seen looking like a miniature bulrush. The fructification may be seen in late Spring to early Summer in New Zealand which is September-November. Sometimes the stroma may divide and have two or three heads."

○サラサレンゲ補遺 (原 寛) Hiroshi HARA: On *Magnolia conspicua* var. *purpurascens* Maxim. again

本誌 55(6): 188-192 (1980) で大場氏は、ハクモクレンとモクレンの学名は Dandy の意見に従って採用するのが正しく、かつサラサレンゲは雑種ではなくハクモクレンの一品種であるとの見解を述べられた。前者は純然たる「命名」上の問題であり、後者は「分類」と「命名」が組み合った問題であるが、説明文中では分り難い点があり、また残念ながらその扱いが不十分で重要な文献の見落しがあり、読者の誤解を招くおそれがあるので、敢えてここに補足することにした。

第一の問題には色々歴史的な背景があり、きわめて慎重に取扱う必要がある。Dandy の論文はすでに1934年に発表されたが、Rehder (1949) は Buchoz の原論文を検討した上で記載が不十分で誤っているとしてこれを採用しない見解を表明した。Johnstone (1955) は Rehder の意見に従い、また日本・中国でも同様な取扱いがなされてきた。Buchoz (1779) の原論文は稀なもので日本ではないと思われるが、そもそも Buchoz が学名を発表する基にした図に問題がある。この図は中国の画家が庭園に植えられている植物を画いたもので、学問的な図として画かれたものではなく、したがって Rehder が指摘したように明かな誤がある。それは花被片の数だけでなく、両種とも萼が盃状で辺がふさ状に裂けているようにかかれていって、Buchoz も原記載で ‘un calice d'une seule piece, mais frangée’ とのべ、*Lassonia* という新属を建てる重要な特徴の一とみている。花をチューリップと比べ、萼があり雄蕊が多数あることを区別点としている。このように実際の植物を全く見ずに、古い誤のある画だけを基にして記載した新属が適法であるかどうかは意見の分れるところで、命名規約にも明記されていない稀な例である。現在の知識からすれば、Buchoz の引用した画はハクモクレンとモクレンの画であることは確かである。しかし Rehder がこの名を採用しなかったのは、すでに多年広く使用されている学名があるのに、それを捨ててまでこのような不正確な発表をとりあげることに対する反対の意向がふくまれているものと思われる。

Dandy はモクレン科の分類に関しては第一人者であり、彼の論文が世界的に高く評価されていながら、この学名がこれまで広く採用されなかったのはそれなりの理由があったことは考慮されるべきであろう。彼のモクレン科の分類についての論文は、1974年に発表された Praglowski, J. & Dandy, J.E., World Poll. & Spor. Flora 3: 44 pp. が最後のまとめとなった。ハクモクレンとモクレンの学名の問題は今後も尾を引いて論議されるであろうし、多くの学者がどういう判断を示すか見守ってゆきたい。

次にサラサレンゲについてであるが、このものが小石川植物園に古くから植えられていたことは確かである。しかしこれが雑種か、ハクモクレンの一形かを定めるのには、精密な分類学的研究が必要であり、当然内外の関連文献を広く参照すべきである。大場氏が引用した文献には分類学上の問題に直接関係のないものがふくまれ、反って重要なと思われるものが落ちている。例えば手近なものとしては、Spongberg (1976) の論文も無視できないであろう。この論文は学名についてはほとんど Dandy に従っているが、この類の生品についての詳しい観察がふくまれ、文献・資料をよく見て書いてある。*Magnolia × Soulangeana* Soulange-Bodin (1826) はハクモクレンとモクレンの雑種として扱われ、花色や花被片の大きさに変化があること、花期がハクモクレンより1~2週間おくれることなどがはっきり書かれている。またハクモクレンの項で var. *purpurascens* にもふれているが結論は出していない。

更に重要な文献は保井コノ博士 (1937) の論文である。この中でサラサモクレン (*M.*

purpurascens Makino) の染色体数は $2n=95$ (5 倍体) であり、ハクモクレン ($2n=114$, 6 倍体) とシモクレン ($2n=76$, 4 倍体) の染色体数の和の $1/2$ にあたり、牧野先生の雜種説を支持するものといふと述べられている。当時保井博士は東京大学理学部植物学教室に所属されていて教室は小石川植物園内にあったので、これらの資料はそこで入手されたと思われる。したがって或はそれは大場氏の観察したサラサレンゲと同一樹である可能性さえある。今更いうまでもなく雜種は両親の中間の性質を示すことが多いが、また一方の親に近い形質を示す場合もある。サラサレンゲは大場氏のいふように花被片の大きさ・形や葉でハクモクレンに近いが、花色や花期でやや中間であり、Spongberg の *M. Soulaugiana* にふくまれると考えられ、更に染色体数から雜種らしいと推定されるならば、雜種と考えた方が理解し易いと思う。また最新園芸大辞典には果実は結実を見ないと書いてあり、これも雜種説を支持する一理由になりうる。

終りに命名上の問題にふれておく。雜種の場合には両親の種が同じ時は、どんな異った形質を示している形でもすべてを最も早い種名の下に扱うことになっている。したがってサラサレンゲをハクモクレンとモクレンの雜種とみなした場合には、*Magonolia × Soulanguiana* の下にふくまれる。しかしこの雜種の中でハクモクレンに近い諸形とモクレンに近い諸形とを別の変種として扱うこともできるし、更に細かく区別をしたい場合には *M. × Soulanguiana forma* (又は cv.) *purpurascens* (Maxim.) と呼んでも差支えない。勿論この時には Maximowicz の var. *purpurascens* の基準標本を確かめるのが第一で、もしこれが実在しないと分った時に初めて大場氏のいわれるように小石川植物園のサラサレンゲがその学名の解釈に重要な意味をもってくる。

和名については何も規約はないが、近年は学名とほぼ同じように扱われることが多い。ハクモクレンとモクレンの雜種の諸型をまとめてサラサレンゲと呼ぶこともできるし、その中のハクモクレンに近い諸形だけをサラサレンゲと呼び、モクレンに近い諸形をソトベニハクモクレン (ニシキモクレン) と呼ぶことも考えられる。更に細かく品種に分けて大場氏のようにサラサレンゲの和名を一園芸品種に限定して用いることもできる。

もともとハクモクレンとモクレンは日本には自生がなく中国原産であり、これらの問題を徹底的に調べるにはもっと多数の中国産の生品・標本を見なくてはならない。またこれらの雜種は特に欧米で愛好され広く植えられており、したがって欧米の園芸上の文献も参照する必要がある。小石川植物園には、サラサレンゲの外にトウモクレンも古くから植えられていて、私も学生時代に毎年春になるとこれらについて先輩や友人と意見を交したことを思い出す。大場氏もサラサレンゲに関心をもたれたのであるから、今後資料を集め形態や染色体など細胞遺伝学的性質をも調べ、内外の文献をもれなく通覧した上で、トウモクレンをふくめて改めてこの問題について誰もが納得できる論文を書いてくれることを期待する。

引用文献

Rehder, A. 1949. Magnoliaceae. In Rehder, Bibliography of cultivated trees and shrubs. 179-183. Spongberg, S. A. 1976. Magnoliaceae hardy in temperate North America. Journ. Arnold Arb. 57: 250-312. Yasui, K. 1937. Karyological studies in *Magnolia*, with special reference to the cytokinesis in pollen mother-cell. Bot. Mag. Tokyo 51: 539-546, t. 13 & 626.

(東京大学総合研究資料館植物部門)

○ショウキズイセンと *Lycoris aurea* の関係 (栗田子郎) Siro KURITA:
Lycoris aurea versus *L. traubii*.

わが国では古くからショウキズイセンの学名として *Lycoris aurea* を用いてきた。

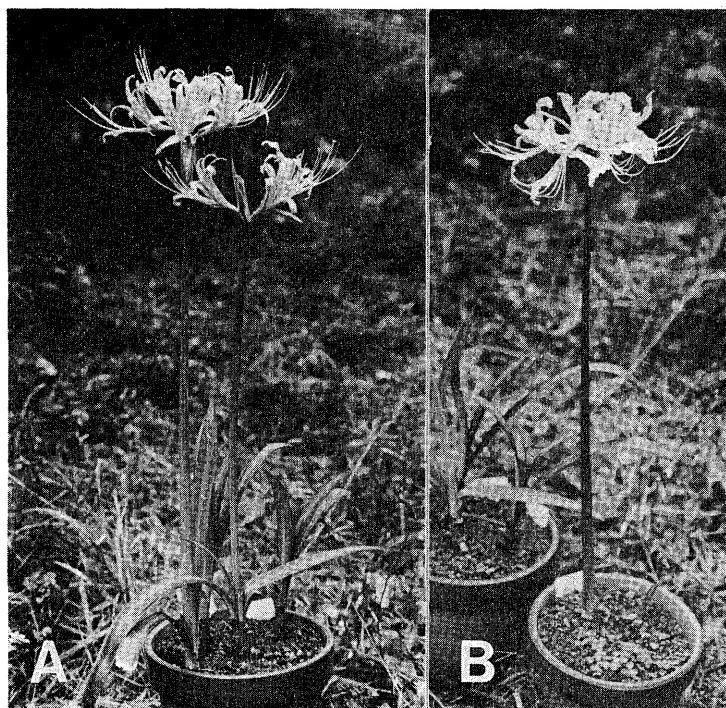


図 1. *Lycoris aurea* と *L. traubii*. A: *L. aurea*. 花茎とともに葉もついている。花はやや上向に咲き総苞片が大きい。B: *L. traubii*. 花は横向からやや下向に咲き、花糸が花被より下方へたれる傾向がある。総苞片も小さく葉はほとんど伸展していない。ともに10月25日撮影。